

平成22年度 海外研修派遣 報告書

京都大学病院 梶迫正明

スタンフォード大学研修の参加目的は、高磁場 MRI や分子イメージングを利用した研究、米国の医療制度、医療施設や3D ラボ、米国の診療放射線技師の状況を実際に見学し、自分にどのように生かすかを考え学ぶことである。

スタンフォード大学の研修は、現在行われている研究や施設の紹介が中心となっていた。内容は具体的かつ丁寧に説明が行われ専門外分野であっても十分に理解し研修を行うことができた。講義のたびに多くの質問や議論をする時間があり、講師の先生と昼食をとりながら交流をはかるともでき、充実した研修体制がとられているように感じた。特に研究施設は設備が大変整っており、せわしない日本とは違うスタイルをとっている。3D ラボの存在も素晴らしい施設であると感じた。検査のプロトコルや3DのマニュアルなどはPhDやMDなどにより厳密に会議などで決められ、そのマニュアルに沿って検査・3D作成が行われている。日本と比較し、よりシステム的な構成となっていると感じた。医療制度についても米国は自由市場主義であり日本の制度とは大きく異なるため、日本と比較し患者の負担は大きい。米国では同じ検査であっても受ける病院によって検査費用が異なる。医療に対する考え方も含め日本の医療体制とは大きな違いを感じた。また、米国の診療放射線技師でも、一般的な資格以外にも各分野の専門技師制度もあり技師の制度も知ることができた。

現在MRを専門に研究を行っているため、MRIに関する講義や見学が最も印象に残っている。7 TMRIの体験や最先端の研究内容にはとても刺激を受け、これからの研究の励みとなった。特にHyper polarizationを利用したMRの技術の講演では、まだ動物実験の段階ではあるが実際に研究が行われており大変興味を持った。

このような米国の放射線技術のスタイルを知ることができた事は大きなメリットであると思う。技師として仕事や研究をしていくうえでも今回の経験は生かされると思う。この研修で得られた成果を研究や業務に反映させていきたい。そして日本と米国の違いを知った上で、どのような放射線技師像が理想的なのかを自分なりに考えていきたい。

最後に、このような素晴らしい海外研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会、引率して下さった九州大学の西川氏、スタンフォード大学ならびにGE HealthCareJapanの皆様に深く感謝いたします。

写真コメント

Lucas Center にて Dominik Fleishmann 先生(左)と筆者

